30

日英ふたつの戴曼公口唇舌診図

安部　郁子
公益財団法人 研医会

2015年5月，ロンドンにあるウェルカム図書館を訪ねる機会があり，限られた時間の中ではあったが，ピーター・コーニツキー先生のご案内で，7点の医学書を閲覧させていただいた．その中の『痘瘡唇舌図』とあった書物の体裁が，研医会図書館所蔵の『戴曼公痘瘡秘中之真秘』という口唇舌診図に酷似していたので，非常に驚いた．そこで両書のちがいと共通点とを観察してみることにした．

【方法】研医会図書館所蔵の『戴曼公痘瘡秘中之真秘』は表紙裏より識語のある最後のページまでが27ページ，ウェルカム図書館所蔵の『痘瘡唇舌図』は最初の「痘瘡唇舌図叙」から識語までが38ページ．共に金の縁で飾られた厚紙に図のひとつひとつを盛り上げて立体的に見せるよう工夫された折本で，緞子の表紙がつけられている．両本を見開きで写真撮影してページごとに比べることとした．また，研医会図書館には『戴曼公痘瘡秘中之真秘』以外にもさらに寛政6年と年不明の2冊の痘瘡唇舌図があり，合わせて4種の本を比較してみた．

【結果】ウェルカム医学図書館の『痘瘡唇舌図』には9ページにわたる叙文がついている．この部分と2図が失われている点，また解説の文章がないことが異なる点であった．叙文は天明8年紀伊弱山　齋藤順が識し，東都　長瀬轍が書いている．

叙文は，この痘瘡という病が『肘後方』に豌豆瘡という名で一方が収載され，『病源候論』では皰瘡の名で載っていたものの『和剤局方』にはその病名がなく，数百年の間，その治療法は見え隠れしているような状態であったことから書き起こされ，また元代，至元（1264–1294）の中頃に痘瘡が大流行し，銭仲陽，陳文仲，李東垣，朱丹溪らの新しい方法が出てきたことが記される．わが国においては天平時代に筑前で流行し，癩風瘡と呼ばれたことを書き，天明5年，摂播諸州に流行があったため，齋藤順が池田錦橋の治痘術の評判を聞いてその治療診断方法をこの本にまとめたと記している．この池田家の持っていた痘瘡の治療診断術は明より来日して長崎にいた戴君曼公から受け継いだもので，明人・戴曼公は長崎に住んだ後，隠元禅師の弟子となって今は宇治の黄檗山，龍興院に眠ると述べている．『唇舌口訣』『百死傳』『治術傳』『痘科鍵標記』『治痘類方』などの書を戴曼公に授かった池田家は，これを4代にわたって伝えてきたが，弟子の桑原玄忠道が安芸宮島におり，その後に浪速に来て齋藤順らに出会ったので，自分たちがこの治術診断法を教えてくれるよう請うたと，医術が伝えられた経緯をまとめている．

ウェルカム図書館の『痘瘡唇舌図』には「十八唇図」と「三十六舌図」それに5つの死舌図が収載されている．研医会本の舌図では「舌常候之図」「八舌之図」という表題が「陽舌十三之図」の途中に出てきており，本を修復しようとしてページを改変してしまった可能性があると推測される．

序文を欠き，ページも改変されているらしい研医会本ではあるが，各図に対する解説という点では詳しく，唇舌の状態を説明し，唇舌以外の身体の状態がどのような場合に死に至るか，あるいは図の状態の時にどのような治療をするとよいかが指示される．また唯一「陰舌十三之図」の表記がある．

ウェルカム本の叙文からはこの本を作成したのが紀州の人であったことが分かり，表紙の葵紋は紀州徳川家に献上されたことを示すのではないかと思われる．研医会本も双葉葵の表紙であり，旗本家などで作られたものなのかもしれない．2書の解説の多寡の意味も考えてみたい．また，2008年の医史学会で西巻明彦氏が「『戴曼公唇舌図訣』の思想について」の中で取り上げられた本についても調べる機会が得られれば，拝見したいと考えている．